森研三、高見弘人共著「カナダの萬蔵物語、The First Immigrant to Canada」を読む

大木　崇

2026 年 5 月

1.　はじめに

1977 年 12 月 1 日に東京の尾鈴山書房から出版された、森研三、高見弘人共著、「カナダの萬蔵物語、The First Immigrant to Canada」は、日系カナダ人社会において「永野萬蔵 1877 年上陸説」を定着させ、日系カナダ人移住百年祭を成功に導くための、象徴的かつ決定的な役割を果たしました。本稿では、先ず、日本語で出版され、英語の翻訳版はなく、主に日系カナダ人一世を読者の対象にしたこの本が、何故、このような役割を担うことが出来たのかを、解き明かします。

私は、エドモントン日本文化協会図書館で、この本を見つけました。しかし、現在、この本のデジタル版が閲覧可能な図書館はありません。古本市場でも、この本の入手が困難なので、この本の概要も紹介し、本に書かれている永野萬蔵の経歴について、各章ごとに検証します。

2.　1970 年代の日系カナダ人社会

2.1　戦後の日系カナダ人の歴史の沈黙の時代

1970 年代は、日系カナダ人の歴史において極めて重要な転換期となりました。1977 年に開催された「日系カナダ人移住百年祭」は、単なる過去の出来事の記念行事にとどまらず、戦時中の強制収容によって大きな打撃を受け、分断されていた日系コミュニティが再び結集し、自らのアイデンティティを取り戻すための壮大な文化運動としての性格を帯びていました。この百年祭が企画され、社会的なうねりとなって成功を収めた背景には、1970 年代のカナダ社会全体を包み込んでいた政治的・文化的変化と、日系カナダ人社会内部における世代交代や、権利回復への強い渇望が複雑に絡み合っていました。では、なぜ当時の日系カナダ人社会がコミュニティの再構築を目指して「歴史の起点」を必要としていたのでしょうか。

日系カナダ人の歴史を語る上で避けて通れないのが、第二次世界大戦中の過酷な経験です。1942 年以降、カナダ政府の政策により、日系カナダ人は「敵性外国人」として扱われ、ブリティッシュ・コロンビア州の沿岸部から内陸部の収容所へと強制移動させられました。この過程で彼らの財産やビジネスは没収され、戦後も、1949 年 4 月 1 日まで、元の居住地への帰還が禁じられたため、多くの人々がカナダ東部などの見知らぬ土地への再定住を余儀なくされまし

た。この強制的な離散は、物理的なコミュニティの破壊にとどまらず、日系カナダ人社会の中で伴侶を見つける機会、世代を超えて受け継がれるべき歴史や文化、特に、日本語を継承言語として学習する機会、家族の記憶といった精神的な基盤をも、根底から奪い去るものでした。

戦後の日系社会は、カナダ社会からの厳しい差別や偏見から身を守るため、過去の苦難について語ることを避け、周囲の白人社会へ「同化」することを最優先とする「沈黙の時代」を長く過ごすことになりました。その結果、戦前に存在していた初期移民たちの活動記録やコミュニティの歴史的記憶は散逸し、日系社会には大きな「歴史の空白」が生まれていました。

2.2　1970 年代の日系カナダ人のアイデンティ模索の時代

しかし、戦後 30 年が経過した 1970 年代に入ると、コミュニティの内部で大きな世代交代と意識の変化が生じ始めました。強制収容を子ども時代や青年期に経験した二世世代は、この時期には 30 代から 50 代の働き盛りを迎え、教育やビジネスの分野で成功を収め、カナダ社会において一定の社会的地位を確立していました。彼らは生活の安定とともに自信を取り戻し、長年強いられてきた沈黙を破り、自らのルーツや過去の不当な扱いについて声を上げる準備を整えつつありました。さらに、戦後に生まれ、カナダの大学で高等教育を受けた三世世代も台頭してきます。彼らは、白人主流社会の中で育ちながらも、自らの文化的アイデンティティに強い関心を抱き、親世代が経験した理不尽な歴史に対して疑問を投げかけるようになりました。この二世と三世の台頭による「沈黙の世代」から「声を上げる世代」への転換が、コミュニティ内部から歴史を語り直そうとする原動力となっていきました。

2.3　カナダ社会のパラダイム・シフト

こうした日系社会内部の意識変化を強力に後押ししたのが、カナダ社会全体の政治的なパラダイムシフトでした。1971 年、当時のカナダ政府は世界に先駆けて「多文化主義」を国家の公式政策として採用しました。この政策は、マイノリティに対し同化を強要するのではなく、自らの文化や歴史を保持し、それを語ることを積極的に奨励するものでした。政府はマイノリティの文化団体への助成金交付やコミュニティセンターの設立支援、エスニック・ヒストリーの研究促進などを通じて、多様なコミュニティの活動を支援しました。日系カナダ人にとっても、この多文化主義の導入は、長らく隠してきた自らの歴史を、堂々と表舞台で語ることが公的に認められるという劇的な環境の変化をもたらしました。これは、過去の歴史を再評価し、自らのアイデンティティを再構築するための強力な「追い風」となったのです。

1970 年代はまた、北米全体で公民権運動や先住民の権利回復運動、アジア系アメリカ人運動などのマイノリティによる社会的正義を求める運動が活発化した時代でもありました。この世界的な人権意識の高まりという潮流の中で、日系カナダ人もまた、自分たちの権利を主張し、過去の歴史的不正義を正すことが正当な行為であるという認識を深めていきました。こうした背景のもと、全カナダ日系人協会（NAJC）などの組織を中心として、戦時中の強制収容や財産没収に対するカナダ政府への謝罪と補償を求める「レドレス（補償）運動」が静かに、しかし確実に胎動し始めました。

レドレス運動を前進させるためには、単に被害を訴えるだけでなく、自分たちがカナダ社会にいかに貢献してきたか、どのような理不尽な歴史を歩んできたのかをカナダ社会全体に向けて説得力を持って提示する必要がありました。そのためには、失われたコミュニティの歴史を掘り起こし、客観的な事実に基づく「正しい歴史の語り」を構築することが急務となったのです。

戦後の分断から立ち直り、文化会館の設立や文化祭の開催などコミュニティの再構築が進む中で、日系社会は一つの大きな壁に直面していました。それは、長年の沈黙と記録の散逸によって、「自分たちはいつ、どこからカナダにやってきて、どのような歩みを進めてきたのか」というアイデンティティの根幹に関わる共通の物語を見失っていたことです。レドレス運動を進め、若い世代に誇りあるルーツを伝えるためには、曖昧な記憶の集合体ではなく、誰もが共有でき、誇りを持てる明確な「歴史の起点」が不可欠でした。すなわち、日系社会の再生と再結集を果たすためには、バラバラになった人々を一つに繋ぎ合わせるための象徴的な「出発点」という物語が、何よりも求められていたのです。

３.「カナダの萬蔵物語」出版の経緯

3.1　高田豊秋による「永野萬蔵」の再発見

この強烈な歴史的希求に対する答えをもたらしたのが、歴史家・編集者の高田豊秋による「永野萬蔵」の再発見でした。1970 年代初頭、高田はチャールズ･ヤングとヘレン･リードが 1938 年に著した『日系カナダ人』という本[1]の中で、永野萬蔵が 1877 年に船乗りとしてカナダに渡り、 ウェストミンスターに定住したと主張する一節を偶然見つけました。永野萬蔵の名前やその功績は、戦前の日系コミュニティの一部には存在していたものの、戦後の強制収容を経て、当時の日系カナダ人にはほとんど忘れ去られた存在となっていました。高田はこの「1877 年」という年号に大きな意味を見出しました。1877 年を起点とすれば、まさに 1970 年代の当時が

「カナダ移住 100 年」という歴史的な節目に当たることに気づいたのです。彼は、この「最初の日本人移民」という明確な物語が、分断されたコミュニティを再び一つに結集させるための完璧な象徴になると直感しました。高田のこの再発見を契機として、1977 年を「日系カナダ人移住百年祭」として全国規模で祝うという構想が立ち上がり、コミュニティ全体を巻き込む一大ムーブメントへと発展しました。

3.2 「カナダの萬蔵物語」の出版

この百年祭の開催に合わせて、森研三と高見弘人によって記念出版されたのが『カナダの萬蔵物語』です。この書籍は、限られた一次資料や古い邦字新聞の記事、関係者への聞き取り調査などをつなぎ合わせ、永野萬蔵の波乱万丈な生涯を一つの物語として再構成したものでした。『カナダの萬蔵物語』は単なる個人の伝記にとどまらず、「私たちの歴史はここから始まった」という明確な「歴史の起点」を日系社会に提示する役割を果たしました。この本の著者は、永野萬蔵という長崎県口之津という辺鄙な村の一人の青年が、世界に飛躍するという志を起て、苦労の末に、ビクトリアで商売を成功させたが、2022 年に住居兼店のビルを焼失し、病に倒れ、最後は口之津の故郷に帰って一生を終えたという物語を作りました。この物語は、強制収容後の差別と同化圧力の中で自己肯定感を失いかけていた日系カナダ人たちに対し、「自分たちは 100 年もの長い歴史を持ち、カナダ社会の発展に深く貢献してきた」という強い誇りを取り戻させる象徴的な物語になったのです。

1970 年代における日系カナダ人社会の歴史の再発見と百年祭の熱狂は、単に過去を懐かしむためのものではありませんでした。世代交代、カナダ政府の多文化主義政策の導入、マイノリティの権利意識の高まり、そして強制収容からのレドレス運動の始動という、複合的な社会的背景の中で、日系カナダ人コミュニティが未来に向かって新たな一歩を踏み出すために必要不可欠なプロセスでした。強制収容によるコミュニティの破壊と、アイデンティティの喪失という深い傷を乗り越え、自分たちの権利と尊厳をカナダ社会に主張していくためには、共有可能な「誇りある歴史の起点」が絶対に必要だったのです。永野萬蔵の 1877 年上陸という物語は、近年の歴史研究においてその史料的裏付けの不確実性が指摘されているものの、1970 年代という特定の時代状況において、日系社会が自らのルーツを再確認し、コミュニティとしての連続性と結束力を回復するための「象徴」として、文化的・政治的に極めて重要な役割を果たしました。この歴史の再構築のプロセスこそが、その後のレドレス運動を成功へと導き、現在の日系カナダ人コミュニティの多様で力強い活動の基盤を築く原動力となったと言えます。

「カナダの萬蔵物語」は日本語版のみで、英語版はありませんでした。しかし、百年祭の実際の活動は全て英語で行われ、「カナダの萬蔵物語」をベースに作られた「英語版の萬蔵ストーリー」が、英語のスピーチ、パンフレット、新聞記事、展示パネルなどで、日本語が読めない日系カナダ人の中に拡散していきました。これら英語世代の日系カナダ人は、「カナダの萬蔵物語」が作った物語の枠組みの中で百年祭を経験したのです。

4.　萬蔵 1877 年上陸説に対する批判

「1877 年上陸説」に対する近年の史料批判（主にスウィッツァー夫妻らの研究による検証[2]）は、永野萬蔵自身の証言の矛盾と拡大、および客観的な公的記録との不一致という側面から徹底的に行われています。具体的には以下のような点が指摘されています。

4.1　萬蔵の証言の時期による矛盾と「物語の拡大」

- 1909 年の記録（石立澄夫の聞き取り）：石立の著書[3]では、萬蔵は「1877 年（明治 10 年）3 月にビクトリア港に上陸した」と語っていますが、石立自身も「確固たる証拠は現存しない。推測するしかない」と明記していました。また、この時点では永野自身も「最初の移民」とは名乗っておらず、「最も初期の移住者の一人」であると語るにとどまっていました。

- 1920 年の記録（中山仁四郎の聞き取り）：11 年後の中山のインタビュー[4]になると、萬蔵は上陸地をニュー・ウェストミンスターへと変えて語っています。さらに、その後フレーザー川で鮭漁をし、バンクーバーでの港湾労働を経て、上海、香港、長崎などを渡り歩いたというダイナミックな「冒険譚」が大幅に追加されていました。スウィッツァー夫妻、この 1920 年当時の萬蔵が、病気や生活の困難から取材者を失望させまいとして話を誇張した可能性を指摘しています。

4.2 カナダの公的記録による裏付けの欠如と矛盾

- 上陸記録が存在しない：永野が 1877 年に到着したことを直接証明する当時の公的文書（乗船名簿など）は現存していません。

- 公的な宣誓や申告内容との矛盾：1897 年に行われた帰化申請において、萬蔵自身が宣誓のもとで「1892 年にカナダに来た」と明確に述べています。さらに、1901 年のカナダ連邦国勢調査では、調査員に対して自らの移住年を「1886 年」と申告しており、本人の公的な主張は一貫していません。

- 確実な居住記録は 1892 年以降： カナダで萬蔵の存在を確実に裏付ける最初の公的記録は、1892 年のビクトリア市の住所録（ディレクトリ）です。

4.3　日本側の記録・家族の出来事との不一致

- 萬蔵は 1877 年から 1891 年までカナダや海外を放浪し続けていたと語っていますが、実際には 1887 年に日本で長男（ジョージ）をもうけていることが結婚証明書等から分かっています。
- また、1887 年に本籍を横浜へ移したという公文書が残っており、故郷の長崎県口之津を調べても 1892 年以前の海外渡航を裏付ける記録は存在しませんでした。

4.4　史料批判の結論

これらの検証結果から、近年の歴史研究では「1892 年以前の永野の動向は一切の裏付けがなく、信頼できない[5]」と結論づけられています。1892 年以降にビクトリアで実業家として重要な役割を果たした日系社会の先駆者であることは事実ですが、「1877 年に上陸したカナダ最初の日本人移民」という定説は、客観的証拠に欠ける後年の証言を基に形成された「物語」であると評価されています。

5.　現在の日系カナダ社会における萬蔵の位置

現在の日系カナダ人社会における「カナダの萬蔵物語」および永野萬蔵の受け止められ方は、1977 年の「日系カナダ人移住百年祭」で熱狂的に神話化・象徴化された時代から落ち着き、現在はより客観的でバランスの取れた評価へと変化しています。

具体的には、以下の 3 つの側面から捉えられています。

5.1「歴史の起点の象徴」としての定着

現在でも、日系カナダ人の歴史を語る上で、萬蔵は「最初の日本人移民」や「日系史の最初の章」として、博物館の展示や学校の教育資料などに頻繁に登場します。また、1977 年にカナダ政府によって命名された「マウント・マンゾウ・ナガノ（永野萬蔵山）」は、日系コミュニティの歴史的誇りの象徴として現在も受け継がれています。日系史を語る上で欠かせない「基準点」としての役割は、今日でも確固たるものです。

5.2 神格化の薄れと学術的な再評価

百年祭の時期に見られたような「日系社会の父」といった神話的な扱いは薄れています。近年の歴史研究では、彼の足跡（特に 1892 年以前の移動経路など）に含まれる史料の矛盾点も、冷静に研究対象とされています。 また、萬蔵は商業で大きな成功を収めたことや、戦前の日系カナダ人コミュニティ形成期にはすでに帰国していたことから、「初期移民の重要人物ではあるが、漁業や林業に従事した当時の典型的な日系移民の代表像ではなく、むしろ例外的な存在である」という二面性を持つ人物として学術的に評価されています。

5.3 コミュニティにおける一般的な認識と感情的な距離

一般の日系カナダ人の間では、「最初にカナダへ来た人」として名前は広く知られているものの、日常的に頻繁に語られる身近なヒーローというわけではありません。現在の日系コミュニティの人々にとっては、戦時中の過酷な強制収容の経験や、その後の戦後再建・権利回復（レドレス）運動の歴史の方が、より身近で感情的なつながりの深い出来事として認識されています。

総じて、現在の萬蔵物語は、盲目的に称賛される「物語」から脱却し、「日系カナダ人の歴史が始まった出発点」という重要な象徴として受け止められていると言えます。

6. 「カナダの萬蔵物語」の内容と検証

6.1 「カナダの萬蔵物語」出版の経緯

高田豊秋による永野萬蔵の発見に触発されて、森研三は高見弘人と共に、永野萬蔵の生涯を描くことを思い立ちます。森は第 1 章で次のように述べています。

「これは、安政に生まれ、大正に死した、ウルトラマン・永野萬蔵の物語である。

永野の一生は波乱万丈。生涯のほとんどを創成期のカナダで過ごしたため、その記録をさぐることはきわめて困難だった。困難であるがゆえに、日系カナダ人や郷里の長崎県口之津町に語り伝えられている永野萬蔵の姿は、巨像（それも愚像）に等しかった。

だから、私たち二人の調査結果も「盲が巨象をなでる」類に陥る危険性が最初から多分にあった。

その危険に、私たちは、挑戦した。冒険好きでない二人は、しばしば躊躇することがあった。しかし、日本人のカナダ移住百年祭（別項）が行われる一九七七年を過ぎては、再び話題としても浮かび上がらないであろうことを予測して、この際にペンを執る“蛮勇”にでたのである。

この書が、ベストでもベターでもないことを私たちは心得ている。でも、この書を読まれて、日本人のカナダ移住史の端緒を少しでも知っていただければ幸いだと思っている。また、初期カナダ移住の研究者の役に立てれば幸いである[5]。」

「さて、この年の三月。全く突然的に私たちは、今は亡き永野萬蔵の足跡を記録する計画を決め、大急ぎで実行に移していった。なぜなら、移民第一号というのに、注目すべき彼自身の生地の事情（なぜ移住することになったのか？）。足どり（どのようにして密航したのか？）。業績（なぜ成功したのか？）そして彼の人生の幸福感（中年はよかった。晩年はきわめて不遇だった）に関して、カナダ人も、日本人も、ほとんどわかっていないからである。

以来、私たちは、一人がカナダ側から、一人が日本内地側から、萬蔵にまつわるあらゆる事情を、急テンポで調べはじめた。すでに百年祭の幕は、トロント、ヴァンクーヴァー、オタワ、モントリオールと各地で、切って落とされていた。」

森が述べているように、永野萬蔵の生涯の物語を書くプロジェクトは 1977 年 3 月に始まり、同年の 12 月 1 日には本が出版された、極めて短期で完了したプロジェクトでした。

森研三（1914–2007）は、戦前・戦後を通じて日系カナダ社会の歩みを記録し続けた二世ジャーナリストです。バンクーバー近郊に生まれた彼は、幼少期に家族とともに日本へ戻りましたが、16 歳で単身カナダへ再渡航し、高校を卒業後、ブリティッシュ・コロンビア大学で文学の学位を取得しました。戦前には邦字紙の記者として活動し、第二次世界大戦中にはバンクーバー北方の強制収容所に収容されるという過酷な経験をしました。この体験は、後年の歴史記録や日系人の権利回復への関心を深める契機となりました。戦後は『ザ・ニュー・カナディアン』紙の日本語編集助手として復帰し、のちに編集長を務めるなど、長年にわたり日系社会の言論を支えました。また、オンタリオ州およびカナダ民族紙協会の創設に関わり、多文化社会の形成にも寄与しました。

高見弘人は 1936 年宮崎県で生まれ、1965－66 年にカナダに滞在し、日本人のカナダ移住に興味を持ちます。1968 年にまたカナダを訪問し、ユーコン準州を除く、すべて州を訪れて日系カナダ人に会い、「カナダの日本人」を出版します。その後も、1976 年にカナダを訪問して、日本人移住者、特に永野萬蔵について調査をしました。

一次史料が極めて限られている状況下で、森は元新聞記者としての経験を活かして、戦前の邦字新聞（『大陸日報』など）の丹念な読み込みをはじめ、永野家から提供された写真や資料の検証、ビクトリアやバンクーバーの高齢者に対する聞き取り調査（オーラル・ヒストリー）、さら

には公文書館での商業登録などの公的記録の照合など、多角的なアプローチを用いて萬蔵の足跡を立体的に浮かび上がらせました。

森は 1977 年の百年祭の際、百年祭の行事に招かれてトロントに滞在していた萬蔵の長男ジョージ・タツオ（当時 88 歳）や、孫で哲学博士のパウロ・永野に対してインタビューを行いました[6]。しかし、多忙だった萬蔵が家庭で多くを語らなかったため、子孫でさえ萬蔵が最初の日本移民であったことは知らず、また日本の生活習俗や父の過去をほとんど、なにも知りませんでした。このインタビューは、萬蔵の全体像を描き出すためには貢献がありませんでした。

6.2 「カナダの萬蔵物語」の目次

目次は次のとおりです。

6.2.1 萬蔵物語

第一章

- プロローグ その一（維新と萬蔵）..... 1
- その二（萬蔵の息子たちと）..... 4
- その三（インタビュー）..... 7

第二章

- 萬蔵の誕生 14
- 萬蔵のバックボーン 22
- アウト＆イン（名無しのマンゾー）..... 25
- （島原の乱）..... 27

第三章

- 少年萬蔵の旅立ち 35
- 大胆な萬蔵 37
- 密航・脱船・上陸 43
- からゆきどん 48

第四章

- 北米カナダへ 67
- 日本の夜明け 81
- アウト＆イン 86

第五章

- ニューウェストミンスター 91

- アウト＆イン 101

第六章

- カナダからオリエントへ 111
- 南京虫 114
- 鉄の男・萬蔵 117
- アウト＆イン 127
- （旅券無しを誇った萬蔵達）..... 133
- （ヴィクトリア・方面）..... 135
- （竹爺さん時代のソーミール）..... 136

第七章

- 七年ぶりの日本人 138
- 秘かに口之津へ 144
- 中国人のカナダ輸送 147
- ワッチカムの苦楽 154

第八章

- カナダ大尽に成功 165

第九章

- 火魔・病魔に襲われる 190

第十章

- 長崎・口之津にて死す 201
- 人間萬蔵の経焉 206

終章

- 萬蔵の末裔 213
- アウト＆イン 223

6.2.2　パイオニアの人たちの素顔

本間 留吉氏 233

田村 新吉氏 236

池田有親の冒険心と聖書 241

相川 之賀氏 245

アメリカ及甚物語 249

山家 安太郎氏 254

宮崎 政次郎医師 258
デイビット鈴木博士 260
北川 源蔵氏 264
井手 律氏 267
トーマス・生山氏 271
今井三男氏夫妻 274
高田氏大いに貢献す 276
フレッド佐々木氏 278
ジョージ石原歯科医 281
バック鈴木氏 282
新橋 善吉氏 285
松居 静枝さん 289
佐藤伝・英子夫妻 291
小林・中島・池田氏 294
吉田 龍一氏 298
宮崎 孝一郎氏 302
レーモンド森山氏 303
足立 ケン氏 304
ロージャー小畑氏 306
ゴードン門田氏 308
数田 喜代三氏 308
ヘンリー清水博士 310
ジョージ田中氏 311
エドワード・井手氏 312
角口 静子さん 313
高島 静枝さん 314
早川 議員 315
春原 順一氏 317
平山一郎二世 320
渡辺ひろ子・渡辺まもる博士 321
林林太郎長老 322

桑原正尚氏 324
和泉キン師匠 325
武田氏と大橋氏 325
石井春雄・好夫氏 326
ケネス外園氏 327
タック井上氏 329

この本には永野萬蔵の物語だけでなく、いろいろな分野でパイオニアとして活動した、または、活動している日系カナダ人が紹介されています。このことからも、日系カナダ人とその歴史を肯定的な視点から捉えようという意図が読み取れます。

6.3　森研三のジョージ・ナガノとのインタビュー

「カナダの萬蔵物語」の第 1 章（プロローグ）に、森研三が 1977 年 5 月 20 日に、ジョージ・ナガノにトロントのホテルでインタビューを交わした時の会話が載っています。森研三がこの本のために作成した取材ノートは公開されていません。このインタビューは永野萬蔵の関係者、それも長男のジョージとのインタビューの記録として貴重なものです。下にこの本のインタビュー部分を抜粋したものを載せておきます。

ジョージ・ナガノ　インタビュー

「そのトロント市のダウンタウン（繁華街）にハンプトン・コートと呼ばれるホテルがある。五大湖の一つオンタリオ湖が窓外に眺められる。一九七七年五月二十日、当ホテルのレストランで朝食をとっている五名の日系人がいた。やがて九十歳という一人の翁を中心に心底五名は仲睦まじくスプーンとフォークを動かしていた。

「こうした経過の中の、五月、百年祭のために発掘されたような、永野萬蔵の息子で、アメリカに生きて住んでいるといわれた、幻？のジョージ・永野翁が、カナダのトロントへ、三世、四世をともなってやってきたとの情報を、絶対に逃してならない境地に追い込まれていた。

　ジョージ・永野翁の年齢から見て、もしこの時機を逸したら、いつ父・萬蔵の後を追うような結果になるかわからないーと心の中で失礼を詫びながら、同時に、しかし、息子でなければ父親の素顔はわかりにくいし、少なくとも父親に関して、相当くわしいはずだとの期待を抱いて、インタビューを申し込んでいた。その了解がようやく得られたのは五月十五日だった。

かくてホテルに投宿しているジョージ・永野翁とのインタビューを行い、幻のファースト・イミグラントの証言記録をまとめる一つの方法を試みたのだった。」

「私（M）は、約束の午前八時十五分にホテルに着いた。レストランに向かって歩く。レストランにはいる。つと立ち停まり、日系人の五名をこの眼で認める。その中にジョージ・永野翁のいることを確かめると、もう、胸はいっぱいになりつつあった。私は彼らのテーブルに近寄り、まず、なにはさておいてジョージ・永野翁にあいさつした。

「ラブリィ・モーニング。ミスター・ナガノ」そういって私がシェイクハンドを求めると、彼は待ち構えていたかのように、私の掌をグイッと力強く握りしめ「やぁ、モーニング！あなたを待っていました。」ジョージ・永野翁は快く私を受け入れてくれた。

ジョージ・永野翁の、すぐそばのイスに座るようにやさしく案内してくれる二男ジャックさん。隣席のタイラスさんはジョージ翁の長男。彼のそばにはジャックさんの妻ルイーズさんがいた。そして中央ほどに戦後に移住した長女の順子さん。この五人を前にして私はインタビューを開始した。ジョージ・永野翁は二世だが、日本語を混じえて答えてくれた。」

「――あなたのお父さんがカナダ移住者の第一号ということを、あなたは以前から知っておられましたか？

【ジョージ・永野】 とんでもありません。全然知りませんでした。パパが第一の人間だなんて、考えてみたこともありませんでしたよ。ミスター・タカダ（注：トーヨー・タカタ）が、去年だったか私の住むアメリカのロスアンゼルスにこられて、そのようなことをいわれた。そのとき、私は大変びっくりしました。それでも本当と思わなかった。

――それから、少し失礼な質問ですけれど、あなたのお母さんは、あなたがまだ三歳の時に亡くなられた。それでとお父さんは二番目の奥さんを迎えられた。しかし、あなたたちの成長を見とどけ、あなたたち自身が結婚してアメリカへ移るときに一緒に住んでいたのは、お父さんにとって三番目の奥さんだった。多與子さんという人物。この人の感想は如何ですか？

【ジョージ・永野】 悲しいことに私のママは、私を生んだあと体調がすぐれないまま、三年後に死にました。でも、三番目の母もよくしてくれましたよ。パパは仕事でいつもハッスルして私の気持ちなど「ドン・ケア」（無関心）しかも頑固一徹でしたが、母は私の意見を聞いてくれたから。

このとき、二番目の母についての感想が、ジョージ翁から何か聞かれるだろうか？との気遣いは的中した。二番目の母は、二男・フランク照麿さん（故人）の実母だが、彼の母は遂にカナダへ渡らず、名前も不確か。謎の人物とされていたからである。ジョージ翁と腹違いの人物についての噂が、世間的な噂を越えていたため、気遣わざるをえない条件があった。つまり、二

男の母は、法的な妻として長崎県口之津町の戸籍には記されていなかった。二男は日本のどこか？で生まれたのち、カナダへ連れて行かれ、カナダ生まれとされた秘密が私の耳へ痛く響いていたのだった。

――それで、あなたたちは、結婚いらいアメリカで生活した。お父さんは晩年不遇だったと聞いている。その不遇さにめげず、第三の夫人は長崎県に帰って最期まで見届けて、自分の郷里へ引揚げられた。三番目のお母さんの出身地はどこだったのですか？そして、二番目のお母さんの出身地は？

【ジョージ・永野】 それが残念ながら、二番目の母も、三番目の母も確かな出身地を知りません。パパはいつも忙しく、子どもの私たちに何も語ってくれなかった。そして語る必要があるきた時期にパパは、すでにセント・ジョセフ病院に伝染病で隔離され、長話はできない状態でした。

――お父さんの郷里、長崎へ行ったことがありますか？

【ジョージ・永野】 いいえ、ありません。

――では、お父さんの生地がどんな所で、どんな習俗の生活をしているかも知らないのですか？

【ジョージ・永野】 行ったことがないから知りませんね。戦争も災いした。娘から聞き、他人から聞き、また本を読んで少しは知っています―といっても、それは想像です。聞いたり、読んだりで知っているといったら、ウソになります。」

――百年前にお父さんはカナダへこられた。あなたには、すでにひ孫がいらっしゃる。お父さんから数えると五世の子供さんも育っている。五世と近く会われるわけですね。お父さんの生年月日は安政二年三月で、いまから百二十二年前です。どんな国が想像できますか？

【ジョージ・永野】 ノウ。ノウ。全く想像もできません。（老いの手を左右にふりながら、素直に答えた。）

――最後に、日系百年祭にカナダへ招待された感想を？

【ジョージ・永野】 大歓迎されて嬉しい。特にパパの存在がカナダの首相からも認められて無上の光栄です。私は小さい頃、母が死んだのでよく可愛がられた。成長するにつれてきびしかった。今また私が老人になって誇りを与えてくれた。百年祭委員会の人たちに心から感謝しています（このインタビューでは、長男タイラスさん。長女順子さんが助太刀した。そして、第

三夫人多與子さんの出身地が鳥取県ということは順子さんから明らかにされた。また、二カ月後には、連邦政府地図委員会が、ヴァンクーヴァー市の近くにある標高二千メートルの山を「マウント・ナガノ・マンゾー」（永野山）と命名するホット・ニュースがテレビで伝えられた。）

取材の時、永野翁は、ときどきオレンジ・ジュースでのどをうるおしながら答えてくれた。父の生国のことはほとんど知らなかった。それを素直に語ってくれた。約一週間前から続いていた各都市の百年祭に出席して大いに歓迎され、そのことを大変喜んでいたが、百二十二年前の質問になると答は渋くノーであった。質問する私にも正直なところ、百二十二年前の日本のことがわかっているわけではなかった。五十年前、日本で教育を受けた私には推測は充分にできた。私はその推測を端的にわかるように「日本人がまだ“ちょんまげ”をゆっていた時代ですよ。士、農、工、商という一種のカーストがあって、まだサムライの威張っていた時代ですよ」と説明すると、ジョージ・永野翁は「ちょんまげ？あのカツラ髪のような？ほほう。そんな遠い時代ですかね」と、いぶかる様子だったが「うん。それならムービィ（映画）で見たことがある」とようやく想像の域に達したようだった。」

「このインタビューで私の期待していた幻の第一号移住者、永野萬蔵に関する素顔の一部はとらえることができた。本書の読者もインタビュー内容から何かを察知されると思う。しかし、キメ手となる重要な事は何一つ得られなかった。そこで、私たちは、トロント・宮崎間の国際電話で緊急に相談の結果、きわめて一般的な方法ではあるが「できる限りベストを尽くし、ドキュメントを根底にして」、萬蔵の誕生から死去までを「物語」としてスタートさせることにした。」

萬蔵の子孫（左から孫ジャックさん・パウル博士夫人フローレンスさん・孫タイラスさん・長男辰夫さん・孫パウル博士・孫森作順子さん・ジャック夫人ルイーズさん・ジャック夫妻の息子トムさん）

インタビューの内容に対するコメント

このインタビューで、ジョージ・ナガノは、萬蔵が最初の日本人カナダ移民だとは知らなかった、と言っています。スウィッツアー夫妻は、これを、萬蔵が 1877 年にカナダに上陸していないことの、一つの傍証としています。

ジョージは、萬蔵は仕事に忙しくて、ジョージの気持ちなどに無関心だと言っています。また、森研三は、このインタビューについて、「このインタビューで私の期待していた幻の第一号移住者、永野萬蔵に関する素顔の一部はとらえることができた。本書の読者もインタビュー内容から何かを察知されると思う。しかし、キメ手となる重要な事は何一つ得られなかった。」と結論付けています。しかし、この貴重なインタビューの機会に、なぜ森研三は萬蔵について、もっとジョージに聞かなかったのでしょうか。例えば、ジョージは 1910 年、30 才の時にビクトリアで木内サキと結婚し、結婚後もしばらく萬蔵の仕事を手伝っていますから、萬蔵の仕事について知っていたとおもいます。それなのに、なぜ、森研三はこのころの萬蔵のことを、ジョージに聞かなかったのでしょうか。ジョージはこのインタビューの時に 88 才でした。記憶が薄れていて、このような質問をしても、答えは期待できないと、森研三は判断したのでしょうか。

6.5　中山甚四郎の「加奈陀同胞発展大鑑」に収録された、1920 年の中山による永野萬蔵のインタビューの内容と「カナダの萬蔵物語」の内容の比較

現時点でオンラインで、中山甚四郎『加奈陀同胞発展大鑑』にはアクセスできませんが、スウィッツアー夫妻の Discover Nikkei　2024 年 4 月 14 日の投稿、「永野萬蔵（パート 1）— 彼は 1877 年に来たのか?」に、リゲンダ・スミダに「中山による永野萬蔵インタビュー（1920 年）の要約の日本語訳が載っています。このインタビューで永野萬蔵が語った内容を箇条書きにすると、つぎのとおりです。

- 1874 年 19 歳で船乗りになった。
- 1877 年にカナダへ渡航し、ニューウェストミンスターに上陸した。船が去った後もその地に留まった。
- 船を借り、イタリア人のパートナーとともにフレーザー川で鮭漁を行った。これが後に続く日本人漁師たちの先駆けとなった。
- 1880 年、ガスタウン（後のバンクーバー）に移り、港湾労働者として働いた。その後も落ち着かず、上海・長崎・香港などへ航海した。

- 1884 年にニューウェストミンスターへ戻った。その時点で 7〜8 人の日本人漁師がいた。
- その後アメリカへ渡り、再び漁業に従事したが、1886 年に嵐に遭いフレーザー川を遡上した。この時は 5 人の日本人漁師を見つけた。シアトルに戻り、商売を始めた。
- 1891 年に日本へ帰国した。
- 1892 年に再びカナダへ渡り、ビクトリアで店を開いた。
- 1894 年にはブリティッシュコロンビアで塩鮭産業を立ち上げた。

6.6 「カナダの永野萬蔵物語要約」と「中山による永野萬蔵インタビュー（1920 年）」の比較

これら二つの文書を比較し、永野萬蔵の若い頃（船乗りとして出発してから 1890 年代初頭まで）の経歴における類似点と相違点を以下の表に整理しました。

1877 年のカナダ到着から 1880 年のガスタウン（バンクーバー）での労働までの経歴は両者でピタリと一致していますが、1880 年代以降の足跡については全く異なる行動が描かれています。

永野萬蔵の若い時の経歴：類似と相違の比較表

出来事の時期・テーマ	『カナダの永野萬蔵物語要約』の記述	『中山によるインタビュー』の記述	類似 / 相違
船乗りとしての出発	イギリス船の釜焚き補助人夫として雇われ、航海に出る。	1874 年、19 歳で船乗りになる。	類似
カナダへの到着	1877 年にカナダへ密入国を果たす。	1877 年にカナダへ渡航し、ニューウェストミンスターに上陸する。	類似
カナダでの初期の仕事	イタリア人と組んで鮭漁を行い、成功を収める。	イタリア人のパートナーとともにフレーザー川で鮭漁を行う。	類似

1880 年の行動	1880 年、ガスタウン（後のバンクーバー）に移り、港湾荷役の仕事に就く。	1880 年、ガスタウンに移り、港湾労働者として働く。	**類似**
1880 年以降の移動	劣悪な環境下で港湾荷役として働き続け、将来の商売資金のために貯蓄に励む。	その後も落ち着かず、上海・長崎・香港などへ航海に出る。	**相違**
1884 年の行動	帰国の機会を掴み、ハワイを経て日本（口之津）へ向かう。	ニューウェストミンスターへ戻る。	**相違**
最初の日本帰国時期	1884 年に帰国する。	1891 年に帰国する。	**相違**
1880 年代後半の活動	中国人労働者 500 名をカナダへ輸送する秘密任務を帯びて再びカナダへ渡り、鉄道建設に貢献する。	アメリカへ渡り漁業に従事。1886 年に嵐に遭った後、シアトルに戻り商売を始める。	**相違**

このように、1877 年の上陸から 1880 年までの初期のカナダでの行動については、両文書で共通していますが、1880 年以降の行動（アジアへの航海かカナダでの労働か）や、日本への一時帰国の時期（1884 年か 1891 年か)、そして 1880 年代後半の北米での活動内容（カナダでの鉄道建設かアメリカでの漁業・商売か）においては、大きな食い違いが見られます。

森研三は「カナダの萬蔵物語」を書くにあたり、スウィッツアーの主張する 1877 年から 1892 年までの、萬蔵に関する公的記録の空白期については、永野萬蔵が 65 才の時に、中山甚四郎に語った自分の若い時の冒険談を骨格にして、この時代の日本やカナダの事情、永野萬蔵と日本人パイオニアついて聞いた話などを加味して、萬蔵を主人公にした物語を組み立てたと推察できます。

7. 「カナダの萬蔵物語」の各章の要約と検証

7.1 第一章（プロローグ）

要約

永野萬蔵は安政に長崎で生まれ、十八歳まで石炭人夫として働く貧しい生活を送りましたが、外国商人との接触をきっかけに密航を決意し、カナダで日本人移住第一号として活躍しました。創成期のカナダで貿易商として成功し、日本と世界を結ぶ新しい流通を切り開いた萬蔵の行動は、官僚による「タテ割り」の近代化とは異なる、市井の力による「ヨコ割り」の近代化として評価されています。しかし晩年は火災や病に苦しみ、望郷の思いから帰国して口之津で亡くなりました。百年祭での取材では、息子ジョージ氏が父の過去をほとんど知らず、家族の複雑な事情も明らかになりませんでした。著者たちは、限られた証言と資料をもとに、萬蔵の生涯を物語として再構成する決意を固めています。

7.2　第二章「萬蔵の誕生」

要約

永野萬蔵は安政二年（一八五五年）三月、長崎県口之津の貧しい農村で生まれました。母タネは畑仕事の最中に急な陣痛に襲われ、家に戻ると同時に板の間で萬蔵を出産しました。近所の女性たちが助け合い、取り上げ婆が到着する前に赤ん坊は「ウォーギャー」と力強く泣きながら生まれ、その声は「龍のような気性」と評されました。幼い兄の英二は母の苦しむ姿に怯えながらも、弟の誕生に安堵し、家族は新しい命を迎えました。当時の口之津は耕地が乏しく、生活は厳しく、石炭運搬の「イシ船」で働くことが唯一の収入源でした。男たちはフンドシ一つで石炭を運び、女たちは「からゆきさん」として海外に渡ることも多く、貧困が家族の運命を左右していました。また、口之津は島原・天草の乱の激戦地で、住民の多くは移住者の子孫でした。明治以前は平民に姓が許されず、萬蔵も幼少期は「マン」や「マンゾー」と呼ばれていたと考えられます。こうした過酷な自然環境、歴史的背景、そして貧困の中での労働文化が、後に海外へ飛び出し、冒険心と行動力を発揮する萬蔵の気質を形づくったといえます。

検証

永野萬蔵は 1855 年、肥前国高来郡口之津村西大泊において生誕しました 。安政 2 年という年は、前年に日米和親条約が締結され、長年続いた鎖国体制が事実上の終焉を迎えた直後であり、日本全体が「異国」という存在を急速に意識せざるを得なくなった時期です。口之津は地理的に長崎港の喉元に位置し、古くから海上交通の要衝でした。萬蔵が生まれた西大泊は、口之津港の西側に位置し、対岸の天草を間近に臨む場所です。当時の口之津村は、伝統的な漁業と、わずかな耕作地を耕す半農半漁の生活が主でした。しかし、萬蔵の成長に伴い、この静か

な村落構造は、三池炭鉱の石炭輸出という巨大な経済的要因によって劇的に変化していくこととなります。

萬蔵が 12 歳になる 1867 年（慶応 3 年)、口之津の運命を決定づける出来事が起こります。三池炭鉱の石炭が、海外輸出のための中継港として口之津を利用し始めたことです。この年を境に、口之津は静かな漁村から、黒い煙と石炭の粉塵が舞う、ダイナミックな近代貿易港へと変貌を遂げていきます。当時の三池港（現在の大牟田市）は遠浅の有明海に面しており、大型の外国船が直接接岸することは不可能でした。そのため、石炭を一度、小型の「艀（はしけ)」と呼ばれる船に積み込み、口之津まで運ぶ必要がありました。石炭の中継地となったことで、口之津の経済は爆発的に成長した。当時の統計によれば、口之津の輸出額は長崎港を一時的に上回るほどでした。このような口之津で、萬蔵が少年期に石炭運搬船で働いていたということは推測できます。

石炭輸出の活況は、口之津に多様な人々を惹きつけました。明治 30 年代には与論島からの集団移住も行われるようになり、また、近隣の天草や島原一帯から、貧困を背景とした労働者が港に集結してきています。

港は常に活気に満ちていたが、その影には深刻な格差と貧困が存在していました。特に、後に「からゆきさん」と呼ばれることとなる、島原・天草の貧しい農家や漁村の娘たちの存在は、当時の社会が抱えていた最大の矛盾でした。

7.3 第三章「少年萬蔵の旅立ち」

要約

永野萬蔵は、長崎県口之津で育ちながら、幼い頃から並外れた大胆さと行動力を備えた少年でした。家は貧しく、四男で家督を継ぐ立場ではなかったため、彼は早くから自分の将来を切り開く必要を感じていました。村では二男・三男が海外へ出稼ぎに行くことが一般的で、萬蔵も「から行き」への憧れを強め、十五歳の頃、隣人の康吉に誘われて外国行きを決意します。恐れを抱きつつも虚勢を張って応じたこの瞬間に、後の冒険家としての萌芽が見られます。

萬蔵は十三歳のとき、石炭積み込み船で働いていた際、外国人船長に子ども扱いされたことに反発し、突然海へ飛び込むという騒動を起こしました。水夫たちが必死で捜索する中、彼はすでに数百メートル先を悠々と泳いでおり、その度胸と泳力は船長を驚嘆させました。この出来事は村中の評判となり、萬蔵の名は一気に広まりました。以後しばらくは船に乗ることを控えましたが、彼の心には「いつか外国人を雇う側に立つ」という強い気概が芽生えていました。

その後の五年間、萬蔵は漁業や造船所での見習いに励み、外船の修理技術を素早く習得するなど、頭の回転の速さと手先の器用さを示しました。十九歳になる頃には、赤銅色の肌と隆々たる筋肉を持つ働き者として村でも評判となり、海外で働く準備は整っていました。

やがて萬蔵は、口之津での勤勉さが認められ、イギリス船アーガス号の釜焚き補助として雇われます。母タネは息子の豪胆さゆえに心配を隠せませんでしたが、父喜平は「一人前の男になる時だ」と背中を押しました。萬蔵自身も、シャムで成功した山田長政の物語に勇気づけられ、「自分も大きな商売をする男になる」と決意を固めていました。

こうして萬蔵は、上海・香港を経て東南アジアやインドへ向かう長い航海に旅立ちます。釜焚きの仕事は厳しく、英語もわからず白人水夫にからかわれる日々でしたが、彼は持ち前の負けん気と勤勉さで乗り越えていきました。この海外経験が、後にカナダで成功する彼の基礎を形づくることになります。

検証

当時、石炭を運搬したイギリス船は、蒸気機関という最先端のテクノロジーを備えていました。帆船から蒸気船への転換期において、船員に求められる技術も専門化されていました。もし、萬蔵がイギリス船に乗ったとすれば、萬蔵は英語を習得し、近代的な規律の世界で生きる術をならい、世界が海路でつながっていることを実感したでしょう。口之津は後に「日本一船員の多い町」と呼ばれるようになりますが、その伝統は萬蔵の時代に確立されたのでしょう。1960 年代には人口の 6 割が船員関係者であったとされますが、そのルーツは幕末の海運業にあります。

7.4　第四章 北米へ

要約

永野萬蔵が北米カナダへ向かった旅は、口之津港で大量の石炭を積み込む場面から始まります。太平洋には燃料補給港がほとんどなく、明治初期の日本で主要なバンカーポートは口之津を含む数カ所しかありませんでした。口之津はその重要性から外国船の寄港地として栄え、萬蔵もその環境の中で育ちました。アーガス号は横浜で食料や生活物資を補給し、萬蔵は初めて見る都会の空気に驚きつつ、キャプテンの語る「近代国家アメリカ」への期待を膨らませました。船員たちもアメリカへの憧れを抱き、長い航海への緊張と興奮が船内に満ちていました。

太平洋航海は東南アジア航路とは異なり、何週間も海と空しか見えない単調で過酷なものでした。氷室の食料は腐敗し、白人水夫たちは不満を募らせました。萬蔵は豆腐を「ジャパニーズチーズ」と説明され、白人水夫にからかわれた末に大喧嘩となる場面もありましたが、こうした衝突は船乗りの世界では日常の一部でした。やがて一八七七年五月、船はヴィクトリアを経てニューウェストミンスターに到着し、萬蔵は胸の高鳴りを抑えられませんでした。

しかし、ここで最大の難関が待っていました。萬蔵はキャプテンと密かに脱船の約束を交わしていましたが、いざ確認するとキャプテンは賄賂を要求する態度を見せました。萬蔵は怒りを抑えつつ手持ちの金を差し出しましたが、キャプテンはさらに要求を続けました。ついに萬蔵は激昂し、決闘を覚悟してふんどし一つになり、金具を手に構えました。この迫力にキャプテンは折れ、萬蔵の脱船を認めました。この出来事は萬蔵に深い「白人不信」を植えつけ、後の人生にも影響を与える大きな転機となりました。

こうして萬蔵は中国人労働者に紛れて密入国に成功し、二十三歳で未知の大陸に足を踏み入れました。当時の日本はまだ近代国家として未成熟で、パスポート制度も整っておらず、移住は原則として認められていませんでした。脱藩がようやく許され始めた時代であり、萬蔵の行為は法的には「脱国」に近いものでした。しかし、彼にとっては貧困から抜け出し、未来を切り開くための唯一の道でした。

萬蔵が旅立った背景には、日本の激動期があります。彼の誕生前後にはペリー来航、安政の大獄、桜田門外の変、薩英戦争、長州征伐、そして大政奉還と戊辰戦争が続き、日本は近代国家への転換期にありました。明治政府は憲法制定や近代化に向けて動き出していましたが、庶民の生活は依然として厳しく、海外への情報もほとんど届きませんでした。萬蔵はこうした国内情勢を知らぬまま、ただ「外国は賃金が高い」という噂だけを頼りに、己の野心と冒険心を武器に未知の世界へ飛び込んだのです。

このように第 4 章は、萬蔵がカナダへ渡るまでの航海、白人社会との初めての衝突、密航の緊迫した場面、そして彼を取り巻く日本の歴史的背景を重ねながら、若き萬蔵の大胆さと決断力を鮮やかに描いています。

検証

1870 年代のブリティッシュ・コロンビア州バンクーバー周辺は、まだ都市としての形成期にあり、現在のような大都市ではなく、ガスタウンを中心とした小さな開拓地にすぎませんでした。この時期、カナダ太平洋鉄道（CPR）の建設計画が進みつつあり、港湾都市としての発展

が期待されていましたが、アジア系移民の定住はまだほとんど見られませんでした。日本人移民が本格的に姿を現すのは 1880 年代以降であり、1870 年代は「日本人移民前夜」といえる段階でした。

一方、フレーザー川の鮭漁はすでに 19 世紀半ばから重要な産業として発展しており、1870 年代にはサケ缶詰産業が急速に拡大していました。缶詰工場（キャナリー）はフレーザー川河口に次々と建設され、白人・先住民・中国人労働者が中心となって操業していました。日本人漁民がこの産業に参入するのは 1880 年代後半以降であり、1870 年代の段階ではまだ日系漁民の姿は見られませんでした。後年、日本人漁民が大きな役割を果たすことになるフレーザー川河口の漁場利用についても、1870 年代はまだ日系人の関与が始まる前段階であり、産業構造は白人資本と中国人労働者を中心に形成されていました 。このようなフレーザー川の鮭漁の状況を見聞した萬蔵が、自分の体験として、鮭漁のことを中村に話したのでしょう。

7.5　第五章　「ニュー・ウェストミンスター」

要約

永野萬蔵は、香港・安南・シンガポール・インド・ハワイ・米本土を経てきた経験から、英語を完全ではないもののある程度理解できるようになっていました。そのため、英語圏であるカナダ・ニューウェストミンスターへの上陸は、彼にとって幸運でした。上陸後は林で野宿し、翌朝には早くも宿屋を探し当て、身ぶり手ぶりのブロークン英語で宿賃のための仕事を得ることに成功しました。彼の真剣な眼差しと誠実さは相手に強い印象を与え、言語力を補って余りある説得力を持っていました。

やがて萬蔵は白人やインディアンとも交流するようになり、わずかな英語力にもかかわらず、持ち前の指導力と話術で周囲の信頼を得ていきました。最初の仕事は鮭漁で、イタリア人のガエターナ・ポルコと組むことになります。当時のブリティッシュ・コロンビア州では鮭漁が林業と並ぶ主要産業で、鮭は河川を埋め尽くすほど豊富でした。二人一組で小舟に乗り、網を投げ入れて鮭を捕る漁法は比較的単純でしたが、網入れや船の操縦には高度な技術が必要でした。萬蔵は口之津での経験から手漕ぎや投げ網の勘を身につけており、三週間ほどで地元の漁師を驚かせるほどの腕前を発揮しました。

ポルコは船の操縦に長けていましたが、鮭漁の核心である網入れは不得手で、萬蔵の技量に深い敬意を抱くようになりました。萬蔵は鮭の群れを見つける鋭い勘を持ち、スプリングサーモンの漁場を次々と当てていきました。二人の収入は順調に増え、萬蔵の名は宿屋の主人にも高

く評価されました。しかし、萬蔵の性格は常に前進を求め、同じ仕事に安住することを良しとしませんでした。

ある日、ポルコが「ガスタウンで大規模な事業が始まり、高賃金の仕事がある」という噂を伝えました。鮭漁は初夏から晩秋までしか稼げず、宿屋の主人の約束も守られないことに不満を抱いていた萬蔵は、この話に強く惹かれました。ガスタウンは当時まだ寒村でしたが、鉄道建設や港湾工事の噂が広まり、活気が生まれつつありました。

萬蔵は噂の真偽を確かめるため、ガスタウンの酒場に入り、女給から「鉄道駅の建設や港の大工事が始まる」という情報を得ます。ところが、酒代を払おうとした際、手持ちのカナダ通貨がなく、日本から持ってきた貿易銀貨を差し出したところ、店主に「こんな金は通用しない」と罵られ、土人扱いされる屈辱を受けました。萬蔵は必死に説明しましたが理解されず、異国での孤立と差別を痛感する出来事となりました。

それでも萬蔵は落ち込むことなく、むしろ新しい仕事への意欲を燃やし、ガスタウンでの機会をつかもうと決意します。こうして彼は鮭漁での成功に満足せず、さらに大きな商機を求めて動き出すのでした。

7.6　第六章「カナダからオリエントへ」

要約

1880 年初春、永野萬蔵は二年間暮らしたニューウェストミンスターを離れ、現在のヴァンクーヴァー市の原型であるガスタウンへ移動しました。ニューウェストミンスターでの生活は短いものでしたが、鮭漁で共に働いたイタリア人ポルコや、親切に接してくれたインディアンたちとの交流は深く、萬蔵の心に強い名残を残していました。特にポルコとは二年間の大半を共に過ごし、収入配分が六対四で萬蔵に有利であっても不満を言わない温厚な性格で、萬蔵は別れに際して強い同情と感謝を覚えました。しかし、萬蔵にはより大きな発展を求める野心があり、情を断ち切って次の地へ向かう決断を下しました。

ガスタウンに到着した萬蔵は、以前バーで知り合ったイギリス人ジョージ・カナトンを頼り、三流ホテルに宿を取りました。しかし、そこは粗末な木製ベッドと汚れた毛布、そして南京虫の巣窟で、萬蔵は初日から全身を噛まれ、三日目には急所まで刺されるという苦難に遭いました。カナトンは冗談めかして慰めましたが、萬蔵は耐えきれず、ホテルのマネージャーに抗議し、石炭酸での消毒や石灰の散布でようやく被害を抑えることができました。こうした不衛生

な環境にもかかわらず、萬蔵は五日目には早くも仕事を見つけ、ポートムーディでの港湾荷役に従事することになりました。

ポートムーディでの仕事は、外国帆船に木材を担いで積み込む重労働で、白人の大男に混じって働く萬蔵は小柄ながらも鍛え抜かれた筋肉と強靭な精神力で「鉄の男」と呼ばれるほどの働きを見せました。労働時間は十〜十二時間に及びましたが、賃金は当時としては高く、一日一ドルから一ドル三十セントを得ることができました。日本の口之津での賃金が十〜二十銭であったことを考えると、カナダでの収入は破格であり、萬蔵は商売資金を貯めるために酒や遊興を極力避け、貯蓄に励みました。

一方、同時期のカナダでは、鉄道建設労働者の多くが中国人で、危険な作業と劣悪な生活環境に苦しんでいました。萬蔵はそのような仕事を避け、より高賃金の港湾労働を選んだことで、将来の夢に近づくことができました。彼の目標は、五百〜一千ドルを貯めて帰国し、商売で成功して郷里を驚かせることでした。

やがて萬蔵は、帰国のための船を探す必要に迫られ、港湾監督バースに近づくため、彼の通うバーに出入りし、紳士風の服まで誂えて接触の機会を作りました。監督から「ポートムーディ駅建設のために中国人労働者を数百人集める計画がある」という情報を得ると、萬蔵は上海・香港の事情に通じているふりをして話を合わせ、監督の興味を引くことに成功しました。しかし、その裏で水夫崩れのブローカーが現れ、保証金を要求してきました。萬蔵はこれを見抜き、毅然と拒否してキャプテン本人に直接交渉し、ついに乗船許可を得ました。

一八八四年、萬蔵はポートムーディを出航し、ハワイを経て東洋へ向かいました。帰国の途についた彼の胸には、故郷・口之津への思いと、これから始まる商売の夢が大きく膨らんでいました。カナダがまだ未開の地で、ヴァンクーヴァーがテント村に過ぎなかった時代、萬蔵はその厳しい環境を生き抜き、次の挑戦へと歩みを進めたのです。

<u>検証</u>

1858 年、フレーザー川上流（ホープ〜リルーエット間）で金が発見され、約 30,000 人の金鉱労働者が一気に押し寄せたと記録されています。多くはカリフォルニアのゴールドラッシュ経験者で、失業した鉱夫たちが新天地を求めて北上しました。フレーザー川の金は比較的浅い場所にあり、1860 年代半ばには枯渇してラッシュは終息しました。

1880 年代のブリティッシュ・コロンビア（B.C.）沿岸部の木材産業は、金鉱ラッシュ後に急成長し、沿岸の巨大な針葉樹資源を背景に、製材所（ソーミル）と伐採キャンプが急速に拡大し

た“形成期の産業”でした。沿岸部では、河口や湾岸に蒸気式ソーミルが建設され、バラード湾（後のバンクーバー）周辺でもミルが増加しました。1880 年代の沿岸林業は、白人、先住民、中国人労働者など、多様な労働力に支えられていましたが、労働環境は厳しく、事故が多く、長時間労働で、孤立したキャンプでの生活が特徴でした。萬蔵はこのような状況を見聞していて、自分の経験にしたのでしょう。

7.7　第七章「七年ぶりの日本人」

要約

永野萬蔵は、ハワイ・ホノルル港で石炭を積み込んだ際、七年ぶりに日本人らしい男を目にし、胸が激しく高鳴りました。赤ふんどし姿の逞しい薩摩の男を見つけた瞬間、萬蔵の心には、外地での孤独と日本語への渇望が一気に噴き上がりました。七年間、外人とだけ暮らし、英語も不自由なまま誤解や衝突を繰り返してきた萬蔵にとって、日本語で自由に語り合える相手の存在は、涙がこぼれるほどの喜びでした。彼は桟橋へ駆け寄り、「ニッポン人かいの」と叫び、薩摩の男と郷里の訛りそのままに語り合いました。男は妻子を亡くし、支那人仲間に助けられながら働いていると語り、萬蔵はその境遇に胸を打たれました。短い対話でしたが、萬蔵は日本語の温かさ、人間の情の深さを改めて噛みしめ、別れ際には互いに手を振り合い、太平洋の小島での一期一会を心に刻みました。

帰国後、萬蔵を最も喜んで迎えたのは両親でした。母タネは、より逞しく成長した息子の姿に涙を流し、赤飯を炊いて仏前に供えました。萬蔵はカナダでの生活を面白おかしく語り、家族は驚きと羨望をもって耳を傾けました。村でも評判となり、村長や若衆が訪ねてきては萬蔵の話に聞き入りました。萬蔵は得意になり、村長にだけ「カナダ横断鉄道のために中国人五百人を連れてきた」と打ち明け、村長を驚かせました。しかし、村の狭い価値観はすぐに萬蔵を養子縁組へと押し込み、彼は父の顔を立てるために渋々承諾しました。形式的な縁組で、すぐに離籍することになりますが、萬蔵は自分がまだ母の情に甘えていることを自覚し、苦笑しながらも受け入れました。

萬蔵の帰国はわずか二週間で終わり、彼は再び船に戻りました。船にはすでに五百余人の中国人労働者が乗っており、この事実は日本政府の対中・対朝鮮政策を考えると公にできないものでした。当時、日本では中国・朝鮮との接触に関する密令が出されており、萬蔵は口を閉ざすしかありませんでした。デッフレー号は横浜を経てカナダへ向かい、八月初めにヴィクトリア港へ到着しました。萬蔵が集めた中国人労働者は、ほとんどが健康で、船酔いも軽く、雇い主

を満足させる状態でした。過去には衰弱した中国人が多数運ばれ、ロッキー山脈での過酷な鉄道建設に耐えられず死亡する例も多かったため、今回の成功は萬蔵の誇りとなりました。

萬蔵は中国人に偏見を持たず、むしろ若い頃から香港・上海で親しく接してきた経験から、彼らに親しみを抱いていました。明治政府が「征韓論」や帝国主義的政策を進める中でも、萬蔵は政治に関心を持たず、ただ自分の仕事を果たすことに集中していました。中国人労働者たちは、上海や香港の三倍の賃金を得られることを喜び、ポートムーディの鉄道工事に精力的に従事しました。CPR 鉄道の完成はカナダ政府の最重要課題であり、萬蔵の働きは陰ながらカナダ建国に大きく貢献したといえます。

しかし、その功績は白人キャプテンや水夫の名誉として処理され、萬蔵の名が記録されることはありませんでした。それでも萬蔵は気にせず、ただ自分の役目を果たしたという満足感だけを胸に、再び新しい人生へ歩み出していきました。

検証

1880 年代のブリティッシュ・コロンビアは、アジア諸国、特に中国と日本との結びつきが急速に強まった地域でした。背景には、カナダ太平洋鉄道（CPR）建設や漁業・製材業の労働需要があり、約 15,000 人の中国人労働者が 1880 年代に BC へ渡航し、鉄道建設の西部区間を支えました。彼らの労働は不可欠でしたが、白人労働者や政治家の間では「賃金競争」「生活習慣の違い」などを理由に反発が高まり、1885 年には中国人のみを対象とした 50 ドルの人頭税が導入されるなど、制度的差別が強化されていきました。

こうした排斥の動きは、BC 州議会が 1870 年代から進めていたアジア系住民の選挙権剥奪政策とも連動し、1880 年代には「白人の州（A White Man’s Province）」というスローガンが政治的に広がっていきました。白人社会の不安は、アジア系移民の増加を「文明の脅威」とみなす言説に結びつき、新聞や政治家の発言を通じて、さらに強化されました。

一方で、アジア側も BC との関係を深めていました。中国政府はサンフランシスコの領事館を通じて移民保護に動き、1884 年にはビクトリアで華僑団体「中華会館（CCBA）」が設立され、差別への抗議や福祉支援を行いました。これは北米でも最初期の中国系組織であり、BC と中国の社会的つながりを象徴する存在でした。

日本との関係も芽生え始め、1880 年代後半には漁業や製材業に従事する日本人が増加しました。まだ人数は少なかったものの、後のスティーブストンやパウエル街の日本人社会の基盤がこの時期に形成され始めました。

7.8　第八章「カナダ大尽に成功」

要約

永野萬蔵は明治二十六年、ヴァンクーヴァーで塩鮭製造業に着手し、これが彼の人生を決定づける大事業となりました。彼はフレイザー河をはじめ周辺河川の鮭の豊富さを熟知し、インディアンからの情報提供にも支えられて、鮭の大量加工と輸出という構想を抱きました。当時、日本人移民は増加し、鮭を日本へ送る試みも個人レベルでは存在しましたが、「大量獲得・大量生産・安価輸出」という発想を実行し成功させたのは萬蔵だけでした。資金不足の中、彼は思い立つとすぐ行動する性格のまま、ヴァンクーヴァーの田村新吉に共同事業を持ちかけます。田村は慎重な人物で、萬蔵の突飛な計画に難色を示しましたが、萬蔵は「ヴァンクーヴァー近辺の河川で獲れる鮭は、日本に比べてタダんように安くで買えるどがな」と熱心に説得し、ついに田村は出資を決意します。萬蔵は自らの店を抵当に入れて信用を示し、事業への覚悟を固めました。

萬蔵が着目したのは、現地で価値が低いとされたハンバック・サーモンでした。田村は「こちらの貧乏漁師やインディアンでさえ捨てる」と心配しましたが、萬蔵は脂の乗った時期を狙えば品質は悪くないと主張し、塩漬け加工なら十分商品になると確信していました。彼はニューウェストミンスターで漁師やインディアンに大量のハンバック漁を依頼し、通常の鮭の二十分の一という安価で仕入れに成功します。古い家屋を改造した加工場で日系人、中国人、白人を雇い、頭を落とし腹を処理して塩漬けにし、味噌樽や醤油樽に詰めて日本へ送り出しました。しかし第一回の輸出は失敗し、「カシラ付きでないゆえ評判わるし」との電報が届きます。日本の正月用鮭は頭付きが必須という慣習を見落としたためでした。

萬蔵は失敗に屈せず、資金を温存していたことを幸いに、翌年は頭を付けた姿の良い塩鮭を再び樽詰めして輸出しました。これが大成功し、「評判上々。安さで飛ぶ売れゆき」との報が届きます。三か月で一万二千ドルを売り上げ、経費を差し引いても八千四百ドルが残る大儲けでした。日本側では不漁が続いていたことも追い風となり、カナダ産の安価な鮭は市場で歓迎されました。田村は萬蔵の勘と根気に敬意を示し、利益配分を「七分・三分」と自ら申し出て萬蔵を驚かせました。こうして萬蔵は「カナダ大尽」「サモン大尽」「塩鮭キング」と称される存在となり、以後も塩鮭輸出を継続して莫大な利益を上げました。

萬蔵は成功を背景にヴィクトリアのメインストリートに豪奢な三階建てのレンガ造りビルを建て、日本美術品店や雑貨店をヴィクトリア、ヴァンクーヴァー、シアトルに展開しました。民芸品は欧米のオリエント趣味と、横浜—ヴィクトリア航路の発展によりよく売れ、彼の商売は

繁盛しました。また、捕鯨会社への労働者斡旋など多方面で活躍し、ヴィクトリア日本人社会の中心人物として日本人クラブや協和会の会長を務め、日本海軍練習船の寄港時には百回以上の歓迎を主導し、多数の感謝状を受けました。

しかし第一次世界大戦期以降、日系人への圧迫が強まり、漁業ライセンス問題や市民権の欠如が深刻化します。萬蔵の店も売れ行きが落ち、田村らの助言により店舗を統合して経営を縮小しました。大型貨物船の登場による流通革命で、彼の仕入れ方法が時代遅れになったことも背景にありました。それでも萬蔵の四十年にわたるカナダでの事業と社会的貢献は大きく、彼の商才と行動力は並外れたものであったといえます。

検証

1890 年代のビクトリアは、カナダ太平洋岸の主要港として栄え、アジアと北米を結ぶ海上交通の拠点となっていました。日本からの移民は少しずつ増加し、1890 年代にはビクトリアが日本人移民の最初の上陸地として確立していきました。移民の多くは漁業、林業、鉱山、鉄道建設などの労働に従事し、街には日本人の下宿屋や雑貨店、労働仲介業などが徐々に形成されていきました。

しかし、移民の増加に伴い、白人社会の不安や反発も強まりました。特に 1895 年には、日本人住民（市民権の有無を問わず）に選挙権を剥奪する法律が制定され、政治的排除が制度化されました。これはアジア系移民を抑制しようとする動きの一環で、同時期には他の職業や公職への就任も制限されるなど、差別的政策が相次ぎました。

それでもビクトリアの日本人社会は、港湾都市としての利点を活かし、商業活動を広げていきました。日本からの船舶が寄港し、雑貨・工芸品・食料品などの輸入品が流通し、日本人商店は地元住民や他のアジア系移民にも利用される存在となりました。こうした環境の中で、永野萬蔵のような初期移民は、雑貨店や旅館、輸出入業などを展開し、コミュニティの中心的存在として活躍していきました。ビクトリアはまだ人口規模が小さく、バンクーバーのような大都市ではなかったものの、日本人移民にとっては「最初の拠点」かつ「商機のある街」として重要な役割を果たしていました。

スウィッツアー夫妻はディスカバー・ニッケイの記事で、永野萬蔵が 1892 年にビクトリアに来たということは、1983 年のビクトリア市の電話帳に J.M.Nagano という名前が記載されていることで証明出来るとしています（J は萬蔵の英語名 Jack の頭文字）。また、萬蔵がビクトリア市でオリエンタル・バザールという店を経営していたことも、ブリティッシュ・コロンビア州

の商店名簿にこの店が記載されて居ることを検証しています。1890 年代のビクトリア市の状況の中で、萬蔵が店を開いたということは、納得が行きます。

1890 年代のブリティッシュ・コロンビア州は、世界でも有数のサケ漁場として知られ、特にフレーザー川とその支流では毎年膨大な量のサケが遡上していました。この豊富な資源を背景に、BC 州の鮭缶詰産業は急速に発展し、1890 年代には 30～40 以上の缶詰工場（カンナリー）が沿岸部に林立するほどの規模に達していました。工場では主にソッカイ（紅鮭）が高級品として缶詰に加工され、北米やヨーロッパ市場に輸出されていましたが、ハンプバック（ピンクサーモン）やチャム（カラフトマス）などの低価格の鮭は価値が低く、しばしば加工されずに捨てられていました。

この時期、漁業労働の中心は日本人、中国人、先住民であり、特に日本人漁師はギルネット漁の技術の高さから不可欠な存在となっていました。彼らは大量の鮭を水揚げしましたが、缶詰工場が扱わない種類の鮭は市場価値が低く、地元ではほとんど利用されていませんでした。こうした「未利用資源」が大量に存在したことが、塩蔵加工や輸出ビジネスの可能性を生み出しました。

一方で、BC 州の鮭産業は急成長の裏で競争が激化し、価格の変動や過剰生産の問題も抱えていました。工場は利益率の高い缶詰製品に集中し、塩蔵用の鮭加工はほとんど行われていなかったため、日本の正月需要に向けた塩鮭市場とは結びついていませんでした。ここに永野萬蔵が目をつけ、地元で価値の低いハンプバックを大量に安価で仕入れ、日本の市場向けに塩蔵加工して輸出するという独自のビジネスモデルを築きました。

1890 年代の BC 州は、鮭資源が豊富でありながら、加工・輸出の体系が未成熟で、特に日本向けの塩蔵鮭市場は未開拓の状態でした。永野萬蔵の成功は、こうした産業構造の隙間を的確に捉え、地元では価値の低い鮭を日本の高需要市場へ転換した点にありました。BC 州の鮭産業が大量生産・大量廃棄の構造を持っていたからこそ、永野の塩鮭輸出は大きな利益を生み出すことができました。

萬蔵が塩鮭の日本への輸出で協力者として選んだ田村新吉について、森研三は「カナダの萬蔵物語で次のように言っています。

「萬蔵が思ったとおり、田村新吉は、その後、あらゆる困難を乗り越えて、明治四十年（1907 年）には「日加合同貯蓄会社」を設立、日系人実業家の第一人者となり、日本に帰国して貴族

院議員にまでなった。」貴族院議員田村新吉は実在の人物で、バンクーバーとビクトリアとの関係も深いでした。

貴族院議員・田村新吉（1864–1936）について

田村新吉は、明治から昭和初期にかけて活躍した実業家・政治家であり、1925 年に兵庫県の多額納税者として貴族院議員に選ばれた人物です。彼は 1864 年、大坂中之島の熊本藩邸で生まれ、幼くして父を亡くした後、神戸に移り住みました。若い頃から貿易商を志し、神戸の茶商で丁稚奉公をしたのち、アメリカに渡ってシヨトクワ文学会で理科・文科を学び、英語力と国際感覚を身につけました。1888 年頃にはカナダのビクトリアに渡航し、ゲブル商会に勤務した後、1891 年に元領事・神定雄とともにバンクーバーで「神・田村商会」を設立し、日本雑貨の販売を開始しました。

その後、田村は神戸に本店を置く「田村商会」を創設し、東京・大阪・横浜・北米・カナダに支店を展開する大規模な直輸貿易商へと成長させました。さらに、日加合同貯蓄銀行や日加信託を設立して社長を務めるなど、日加貿易の発展に大きく貢献しました。国内でも、日本精米精粉社長、東京内燃機工業社長、太平洋火災保険取締役、神戸商業会議所会頭など、多岐にわたる経済団体で要職を歴任し、神戸財界の中心人物として知られました。

政治家としては、1915 年の第 12 回衆議院議員総選挙で兵庫県神戸市から当選し、衆議院議員を 1 期務めました。その後、1925 年に兵庫県の多額納税者として貴族院議員に互選され、同成会に所属して 1936 年に死去するまで 2 期在任しました。国際経験と貿易実務に裏打ちされた視野の広さから、経済政策や国際関係に関する議論で存在感を示したとされています。
（Wikipedia「田村新吉」、Weblio 百科事典「田村新吉」）

しかし、この田村新吉に永野萬蔵が援助を依頼したという記録はありません。森研三は田村新吉の業績と活躍した時期を考慮して、もし永野萬蔵が塩鮭の日本への輸出を計画していたなら、田村新吉に協力を選んだ可能性は大きいと考えて、この章の物語を作ったのでしょう。

7.9　第九章 火魔、病魔に襲われる

要約

1921 年の春、長野萬蔵は肺結核と正式に診断され、ヴィクトリア市内のセント・ジョセフ病院で療養生活に入ります。当時八歳だった森松枝さんは、萬蔵夫妻の店によく通っていた縁から、多與子夫人に深く可愛がられ、夜道の病院への見舞いにも同行するようになりました。多

與子夫人は子どもに恵まれなかったため、松枝さんを実の娘のように抱きしめ、店の二階に泊めることもありました。松枝さんは、夫妻の部屋の豪華さや、惜しみなく与えられた品々を懐かしみながら語っています。萬蔵の療養は、伝染病への恐怖から周囲にはほとんど知らされず、見舞いに行っても応対されなかったという誤解も生まれましたが、実際には感染防止のための措置でした。七カ月の闘病の末、萬蔵は回復し、多與子夫人は退院の姿を見て涙を流して喜びました。

しかし翌年、萬蔵の人生を決定的に揺るがす火災が発生します。夜半に自宅兼店舗の三階建てビルが炎に包まれ、一階の店、地階の在庫、二階の居室、三階に保管していた有価証券や契約書類まですべてが焼失しました。長年の努力の結晶であった「カナダ大尽」の象徴ともいえるビルは崩れ落ち、萬蔵の精神は急速に衰弱していきました。火災保険に加入していなかったことも大きな痛手で、無一文に近い状態となった萬蔵は、かつて世話をした桑原文平宅に身を寄せることになります。裏庭には、焼け残った「J.M.NAGANO AND CO.」の看板が置かれ、萬蔵の未練と誇りを象徴していたと語られています。

その後、萬蔵は再び病状が悪化し、再入院したセント・ジョセフ病院で喀血します。病院は多與子夫人の付き添いを特別に許可しましたが、彼女は夫の回復を願うあまり、大本教の祈りを病室で熱心に唱えるようになりました。看護婦が入室しても気づかないほどの狂信的な祈りは、病院側にも強い関心を呼びましたが、スペイン風邪流行時の経験から、死にゆく者の祈りを妨げないという方針で黙認されました。萬蔵の病状は意外にも安定し、多與子夫人は大本教の加護だと深く信じました。

しかし萬蔵の心には、ヴィクトリアを離れ故郷へ帰りたいという思いが強く芽生えます。多與子夫人もこれに賛同し、帰国後は京都の御本尊に感謝の誦文を捧げたいと願っていました。息子たちはすでに独立しており、継母である多與子との情は薄かったため、萬蔵は夫婦だけで静かに旅立つことを決めます。出発の日、多與子夫人は松枝さんを抱きしめて別れを告げ、松枝さんも「おばちゃん、どこへ行くの」と泣きながら見送りました。こうして一九二二年春、萬蔵は深い忘郷の念に包まれながら、故郷・口之津へ向けてカナダを後にしました。

検証

森研三は、この本の執筆当時、トロントに住んでいた森松枝さん（70 才）に、萬蔵夫妻についての取材をしています。松枝さん一家はビクトリアの萬蔵の店の近くに住んでいて、松江さんは萬蔵の妻多與子に可愛がられ、一緒に病院に萬蔵の見舞いに行っています。火事で自宅兼商店を失った萬蔵は、かって世話をした桑原文平宅に世話になりますが、森研三は文平の息子、

正雄に、この頃の事情を聞いています。正雄によれば、萬蔵夫妻は、桑原宅の二室を借りて生活していましたが、とても落胆した様子でした、と述べています。森研三は、萬蔵をしているもう一人の日系人、安中からも取材をしています。安中によると、萬蔵の自宅・商店は、三階建の立派なビルでした。

7.10　第十章 長崎、口之津にて死す

要約

永野萬蔵は、長年の海外生活と病苦を経て、1923 年についに故郷である長崎県口之津へ帰郷しました。横浜に着いた時点で体力は大きく衰えており、宿で静養しながら故郷へ速達を送ったところ、口之津の繁栄を支えてきた三井物産の石炭運搬船が三池へ移転し、港が衰退の危機にあるという知らせを受け取ります。少年期から団平船に親しんできた萬蔵にとって、この知らせは時代の大きな変化を象徴するものであり、胸に迫るものがありました。返信を寄せたのは、長兄亀吉の二男・代六の妻スエで、彼女は「萬蔵様には体をこの上にも大事にされ、安心して当家へ住まわれてよろしゅうございます」と温かく迎え入れる言葉を送っていました。

六月、萬蔵はスエの営む「網屋」に身を寄せ、親戚に多與子を紹介します。故郷の空気は彼の体調を明らかに好転させ、食欲も戻り、久しぶりに快活な笑い声をあげるほどでした。しかし、口之津港の衰退は現実であり、三井物産の合理化政策の前に、村の嘆願もほとんど効力を持たない状況でした。萬蔵は湾岸に立ち、幼い頃から自分を育ててくれた海を眺めながら、両親の面影を思い浮かべて静かに過ごします。

やがて六カ月が過ぎる頃、萬蔵の病状は再び悪化し、発熱と衰弱が進みました。当時、肺病は恐れられた伝染病であったため、親戚も距離を置くようになり、「網屋」も営業再開の必要から、萬蔵夫婦は東仲町の太田家へ移ることになります。多與子は新進の医師が長崎にいると聞き、萬蔵を説得して診察を受けさせました。梅村博士は慎重に診察したうえで「静養すればまだ長生きしますよ」と告げ、萬蔵は大いに励まされます。彼は少年期の思い出やカナダでの経験を楽しげに語り、再び子どもに会うためにカナダへ渡りたいという希望まで語るようになりました。

しかし、その希望は長く続きませんでした。長崎市内を見物した際、萬蔵は激しく咳き込み、血の混じった痰を吐き、多與子はその深刻さを悟ります。口之津に戻ってからも病状は回復せず、萬蔵は医師の言葉を信じながらも、次第に力を失っていきました。そして 1924 年 5 月 13

日、子どもとの再会を夢見たまま、静かに息を引き取りました。享年七十、多與子は葬儀を仏式で営み、墓石を建てたのち、自らの信仰の拠り所である京都の大本教本部へ向かいました。

こうして、カナダ移住第一号として波乱の人生を歩んだ永野萬蔵は、故郷で静かに生涯を閉じました。晩年、肺病ゆえに人を避けざるを得ず「ケチ萬」と揶揄する者もいましたが、その生涯が示した挑戦と苦闘の大きさを思えば、そうした陰口はあまりにも小さなものであったといえます。彼の最期には、虚飾のない「人間・萬蔵」の姿があり、その人生は静かに幕を下ろしたのでした。

7.11 第十一章 萬蔵の末裔

要約

永野萬蔵の最終章では、彼の系譜と家族、そして子孫の歩みが詳しく述べられています。萬蔵は「1855 年 3 月 27 日、長崎県南高来郡口之津村…に生まれた」六人兄弟の四男で、実家は「網屋」という屋号を持っていましたが、屋号と職業が一致しない例が多く、網元であったという説には確証がないとされています。明治 1887 年、萬蔵はツヤと結婚し、ヴィクトリアで長男ジョージを授かりましたが、ツヤは若くして亡くなり、墓碑も風化して所在不明となりました。その後、萬蔵は京都の多與子と再婚しますが、同時期に生まれた二男フランク照麿の実母は戸籍に記されておらず、日系人の間では愛人説が語られています。萬蔵は横浜での西洋料理店経営や美術雑貨店の成功を背景に日本を頻繁に訪れ、その過程でフランクの母となる女性と関係を持ったと推測されています。

長男ジョージ辰夫は野球に情熱を注ぎ、ヴィクトリアの日本人チームで活躍しました。後にアメリカへ移住し、三男一女をもうけました。孫たちはカナダ・アメリカ・日本に広がり、国際色豊かな家系となっています。二男フランク照麿も野球好きで、オーシャンフォールズのパルプ会社で日系人ボス大関直幸の右腕として働きました。彼は一男五女をもうけ、娘たちは白人と結婚し、息子テッド鶴雄はフランス系女性と結婚しました。テッドはカナダ移住百年祭で、萬蔵の孫として政府から記念プラークを授与されています。

萬蔵の家系は四代目、五代目へと受け継がれ、特に照麿の孫の一人には「マンゾー」と名付けられた子がおり、白人系の父を持ちながらも曾祖の名を継いでいます。さらに五世として、ジョージの長女順子の孫たちが日本各地で活躍しており、和歌山、愛媛、横浜に暮らす子孫の姿が紹介されています。このように、萬蔵の人生は家族の歴史とともにカナダ日系社会の形成史と深く結びついており、その末裔は現在も多様な文化圏で力強く生き続けています。

検証

ビクトリア市公文書館の永野萬蔵一家の写真（2010 年）。後列左は長男 Tatsuo George,　右は次男 Teruo Frank,前列左はジョージの妻セキ、中央は萬蔵、右は萬蔵の妻多與子。

森研三にとって、「カナダの萬蔵物語」の終章として、「萬蔵の末裔」を入れることは大切でした。それは、萬蔵から始まる日系カナダ人の物語が、萬蔵一代で終了したのではなく、当時の日系カナダ人の物語のように、1870 年代から現在まで続く物語の始まりであることを示すためでした。

スウィッツァー夫妻の萬蔵の検証（Discover Nikkei, April 15, 2024）によれば、永野一家の年表は次のとおりです。

1887 年、萬蔵は最初の妻サヨが、長男、ジョージ辰夫を出産する。サヨは日本で亡くなるが、死亡記録は見つかっていない。同年、萬蔵は本籍地を口之津から横浜に移転させる。

1892 年、萬蔵は二番目の妻、ツヤ、と長男ジョージ・辰夫を伴って、日本からビクトリアに来た。萬蔵は 1897 年の帰化書類に、1892 年にカナダに来たことを宣誓した上で述べている。1893 年、ツヤは娘のハルを出産するが、二人とも 7 か月以内に死亡する。二人はビクトリアのロス・ベイ墓地に埋葬されている。

1898 年、萬蔵は三番目に妻、多與子と結婚するために、日本に一時帰国する（萬蔵の中山甚四郎に対する証言）。多與子は 1898 年 10 月 3 日にビクトリアで、フランク・輝満（てるまろ）を出産。フランクの誕生後、子どもは生まれなかった。ジョージとフランクはビクトリアで成人したのち、萬蔵から独立して生活した。

「カナダの萬蔵物語」とスウィッツァー夫妻の萬蔵の検証との大きな違いは、萬蔵の次男フランクの出生についてです。森研三は、フランクは多與子の子どもではなく、それ以外の子どもだと言っています。フランクは日本で生まれて育てられ、そのごビクトリアにつれてこられたと日系カナダ人から聞いたと述べています。森研三はジョージとのインタビューの後に、次のように述べています。1910 年の萬蔵一家の家族写真には 23 才のジョージと 12 才のフランクが写っていので、フランクは 1910 年までには、ビクトリアに来ていました。

「このとき、二番目の母についての感想が、ジョージ翁から何か聞かれるだろうか？との気遣いは的中した。二番目の母は、二男・フランク照麿さん（故人）の実母だが、彼の母は遂にカナダへ渡らず、名前も不確か。謎の人物とされていたからである。ジョージ翁と腹違いの人物についての噂が、世間的な噂を越えていたため、気遣わざるをえない条件があった。つまり、二男の母は、法的な妻として長崎県口之津町の戸籍には記されていなかった。二男は日本のどこか？で生まれたのち、カナダへ連れて行かれ、カナダ生まれとされた秘密が私の耳へ痛く響いていたのだった。」

フランクの出生に関しての二つの説の、どちらが正しいのか、私には検証できません。

８．おわりに

森研三と高見弘人による『カナダの永野萬蔵物語』は、1970 年代後半に日系カナダ人社会で高まったアイデンティティ復活の要請に応え、コミュニティが新しい時代へ踏み出す後押しをした象徴的な書物でした。この本は、1877 年に永野萬蔵が日本人として初めてカナダに定住したという、当時としては画期的な新発見を土台にしています。萬蔵に関する一次資料が極端に少ないという制約のもとで、森と高見は、1920 年の萬蔵自身による冒険談を骨格に据え、1870

年代から 1920 年代にかけての日系カナダ人社会とカナダ社会の動向を踏まえながら、萬蔵を初期日本人移民の象徴的存在として描き出す物語を創作しました。

ビクトリアに定住した後の萬蔵は、当時の日系カナダ人社会では数少なかった商業・サービス部門で活躍しました。1970 年代に日系社会の主導権を握りつつあった若い二世・三世は、自分たちの成功経験を萬蔵の先駆的な経験と重ね合わせることができ、萬蔵像はコミュニティの自己像を映す象徴として機能しました。

近年の歴史研究では、永野萬蔵が 1877 年にカナダへ定住したという従来の理解に疑問が呈されています。萬蔵は「最初にカナダに定住した日本人」ではなかった可能性が高いと考えられています。しかし現在でも、永野萬蔵は初期の日本人移民を代表する象徴的な人物として広く認識されています。そして 1877 年という年は、1977 年の日系カナダ人百年祭において、日本人がカナダに定住した象徴的な起点としてコミュニティ自身が選び取った年であり、今後もそのように記憶されていくと考えられます。

脚注

1. Charles Young and Helen Reid, *The Japanese Canadians* (Toronto: University of Toronto Press, 1938)

2. Ann-Lee Switzer and Gordon Switzer, Manzo Nagano (Part 1) – Did He Come in 1877? *Discover Nikkei,* April 14, 2024; Ann-Lee Switzer and Gordon Switzer, Manzo Nagano (Part 2) – Did He Come in 1877? *Discover Nikkei*, April 15, 2024

3. 石立澄雄「加奈陀同胞発展史」（バンクーバー、大陸日報社、1909）

4. 中山甚四郎「加奈陀同胞発展大鑑』」（バンクーバー、大陸日報社、1922）

5. 森研三、高見弘人「カナダの萬蔵物語 The First Immigrant to Canada」（東京、尾鈴山書房、1977）、頁 1

６．森研三、高見弘人　上掲、頁 8